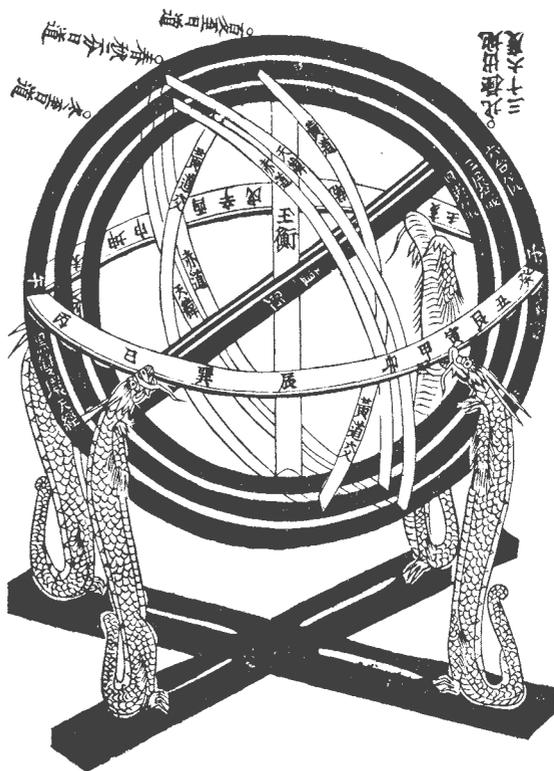


鴨東通信

夏

2011.6 No.82



●知られざるライバル④

明智光秀と細川幽斎

早島大祐

●てーたいむ

やきものが語る文化史

岡佳子

●エッセイ

松花堂昭乗研究と瀧本流手本の出版

山口恭子

ベルツとシヨイベ

森本武利

●リレー連載 世界のなかの日本研究7

「過去」—この未知なる世界へ

ファン・ステーンパール・ニールス

●史料探訪

山奈宗真の「海嘯被害地巡回日誌」

前川さおり

織豊期主要人物居所集成

いどころ

藤井讓治編

織豊期を生きた政治的主要人物の移りゆく居所を通時的に追った研究者必携の書。

居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全であり、公にされることもきわめて少なかった。本書は、多くの研究者が複数の人物を取り上げ、居所情報を複眼的に確定した成果を一覧に供する。

・ 政権の中心人物、政権中枢の人物、有力大名、有力武将、僧侶・文人、公家、政権に関わる女性たち、総勢25名を収録。

・ 各章は「略歴」「居所と行動」で構成され、現在知りうる限りの居所情報を編年で掲載。

・ 辞書的な利用はもちろん、通覧すれば秀吉の天下統一の道程や戦国武将の動静、同時代人たちの交流を詳細に追える。

《収録人物一覧》

織田信長	豊臣秀吉	豊臣秀次	徳川家康	足利義昭
柴田勝家	丹羽長秀	明智光秀	細川藤孝	前田利家
毛利輝元	小早川隆景	上杉景勝	伊達政宗	石田三成
浅野長政	福島正則	片桐且元	近衛前久	近衛信尹
西笑承兌	大政所	浅井茶々	孝藏主	北政所(高台院)

《執筆者》(五十音順)

相田文三(虎屋文庫研究主事)／穴井綾香(九州大学大学院特別研究者)／尾下成敏(京都大学等非常勤講師)／柚田善雄(大手前大学教授)／中野等(九州大学大学院教授)／早島大祐(京都女子大学准教授)／福田千鶴(九州産業大学教授)／藤井讓治(京都大学大学院教授)／藤田恒春／堀新(共立女子大学教授)／松澤克行(東京大学史料編纂所助教)

7月刊行予定

▼B5判・四六〇頁／定価七、一四〇円

たとえば、天正10年6月2日本能寺の変、そのとき・・・

織田信長——京都

未刻とも(『別本兼見』)、申刻ともいう(『兼見』)。6月1日諸家の御礼を請け(『兼見』『別本兼見』『言経』)、勅使を迎える(『晴豊』)。2日未明、本能寺で明智光秀の襲撃を受け自害する(『晴豊』『兼見』『別本兼見』『言経』ほか)。

豊臣秀吉——備中高松

松与申城取巻候(『薄江文書』)。9日高松城を包囲中(同日付村上元吉・武吉宛毛利輝元書状『備中境事、于今羽柴命居陣候』『村上文書』)。そして6月2日の本能寺の変まで備中高松城を包囲する。

徳川家康——堺

6月2日堺→宇治田原、3日宇治田原→山田→朝宮→小川、4日小川→向山→丸柱→石川→河合→柘植→鹿伏兎→関→亀山→庄野→石薬師→四日市→那古(『石川忠総留書坤』『愛知織豊1』)。同日大浜着(『家忠』)。5日、13日岡崎在(『家忠』)。14日岡崎→鳴海(同日付吉村氏

柴田勝家——魚津

が、勝家らは守備を堅固にして、景勝を寄せ付けなかった。5月26日、景勝や松倉城に籠もる上杉勢が越後へ退いたことで、魚津城は孤立する。そして同城は勝家ら織田勢の手に落ちた。6月3日の出来事である(『富山・近世』『上越別2』『公記』)。

※〔 〕内は組見本(70%縮小)

光秀と幽齋がライバルだったかといえば、それは正確ではない。というのも光秀は「細川ノ兵部太夫カ中間ニテアリシ」といわれた人物であり、そもそもが幽齋からは下位に属する足軽・中間ちゆうけんに過ぎなかったからである。

しかし足利義昭の上洛から没落にいたる過程は、「中間」光秀を歴史の表舞台にあげる過程でもあった。元亀二年（一五七二）の延暦寺焼討で随一の勲功を挙げた光秀は、義昭の配下であつたにもかかわらず、信長から近江国滋賀郡と京都の山門所領あてがを宛われ、一気に大身の侍になった。また義昭没落後には村井貞勝とともに京都代官も任されるなど軍事と内政の才に恵まれた人だった。

一方の幽齋も武に加えて文芸・学問の才に恵まれており、その執心が関ヶ原の合戦のさい、彼の命を救つたこと

は周知の通りである。なお彼らの動向の詳細は藤井讓治編『織豊期主要人物居所集成』をご参照いただきたい。

ただし才に恵まれたといつても織田政権で重宝されたのは内政にも長けた光秀だった。天正八年（一五八〇）に幽齋は

丹後一国を与えられたが、その支配は光秀の力に頼るところが大きく、織田家中では光秀付属の部将という扱いを受けたようである。かつての上下関係は、ここに大きく逆転している。

知られざるライバル④

秀光 光秀 と 齋 幽齋 細川

早島 大祐

光秀のこのような急激な出世は相当な嫉妬もかったようで、天正九年末に光秀が家中に出した軍法には、織田家の宿老や直臣、ほかの部将の家中といざこざを起さぬための心得が細かに記されている。織田家中の部将たちから目を付けられることが多かったのだろう。光秀が他の家臣からのまなざしにかなり、敏感だったことがわかる。

しかし、諸事に細心だった光秀も、本能寺の変後、幽齋や筒井順慶など作戦をともした部将たちから誘いを袖にされ、天下人への道は閉ざされてしまふ。聡明過ぎる人の常なのか、人情

の機微には疎かったことが彼の最期からはうかがえるわけだが、光秀について多くを語らなかつた幽齋も、光秀の最後の誘いに沈黙を通すことで自身の心底を示したのである。

（はやしま だいすけ 京都女子大学准教授）

● やきものとの出会い

——今春刊行された『近世京焼の研究』では、先生のやきものに対する、強い愛着が伝わってきます。先生とやきものとの出会いとは。

「あとがき」でも書きましたが、母が常使用のやきものを集めるのが好きだったためか、ずいぶん食器の多い家に育ちました。骨董品や作家物があつたわけではないのですが、このことが少し伏線としてあると思います。

京都女子大学の東洋史学科へ進み、近世経済史の小葉田淳^{こばたあつし}先生に卒論を指導していただきましたが、テーマは幕末の伊万里焼の専売制度。これもやきものに魅せられていたためかもしれません。ただ当時は研究者になるとか、大学院へ進むなどは全く考えていませんでした。

卒業後一年間、カナダに渡り、トロント大学で浮世絵を研究されていたイギリス人の美術史家デイヴィッド・ウォーターハウス先生と、日本人で木版画家の松原直子先生ご夫妻のひとり息子、良樹君のベビシッターとして暮らしました。ご夫妻のもとには芸術家や学者の方々が集まり、日常的に芸術や美術品についての会話が交わされていました。私は英語がほとんど話

ていたいむ

やきものが語る文化史

おか 佳子
（大手前大学教授）

せなかつたのですが、言葉とか国を超えるものが美術ではないか。漠然とですが、陶磁器について学びたいと、その時、思いました。

——今回、鮮やかなカバーや扉の版画と装丁を手がけられたのが松原直子先生ですね。

そうです。松原先生は、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）デザイン科の上野リチ先生のもとでデザインを学ばれて、卒業後にフルブライト留学生として渡米し、カーネギー工科大学（現・カーネギーメロン大学）で修士の学位を得られました。その後一時帰国されましたが、一九六五年に再度渡米され、ニューヨークやボストンで木版画家として活躍され、結婚を機にトロントに移られました。一九七六年に私が出会った時には、すでにアメリカやカナダなどで個展を開催し、数冊の木版画集も出版されておられ、棟方志功と並ぶ木版画家と、高く評価されておられました。二十代から単身でアメリカに渡り、自身の道を切り開いてこられた松原先生から、私は、自立する女性の生き方を学んだように思います。今回のカバー・扉の作品はこの本のための新作です。カナダにいる頃の「もし本を作るようなことがあれば、私が版

画を制作してあげる」との古い約束を、今回果たしていただきました。本来ならば、国際的に活躍しておられる松原先生に、お願いでできることではないのですが、本当にありがたく思っています。

帰国後、もう少し勉強したいと、京都女子大学の修士課程に入学しました。北米では、仕事に就いて学費を貯め、大学院に戻ることはよくあることでしたので、そういった影響もあったと思います。大学院では、愛宕松男先生、村井康彦先生、小葉田淳先生から歴史研究の手ほどきを受けました。小葉田先生は退職されておられたため、愛宕先生から担当教員としてご指導を受けました。先生のご専門は中国元代の征服王朝の研究ですが、私が大学院に入学した頃は、東北大学を退官され、京都女子大に移られて、中国の陶磁器産業史研究に本格的に取り組まれておられた時期でした。ゼミでは『景德鎮陶録』『江西省大志』などを講読しましたが、本当に厳しい指導で勉強になりました。先生は文献と出土資料から、中国の陶磁器市場が、唐・宋・元・明代と、どう変化していくかを追っておられ、私も仁清御室窯にんせいおむろがまの市場について修士論文をまとめることができました。非常勤講師として出講されておられた小葉田先生には古文書学でお世話になりましたが、先生から「仁清の古文書があるんじゃないか」と言われ、金沢の「加越能文庫」(加賀藩前田家の文庫)へ行くと、本当に御室焼や仁清に関する新史料を発見することができました。村井先生の『中右記』講読ゼミにも参加し、日記史料を読み込むことを学び、京都文化や茶の湯のことも教えていただきました。大学院時代から京都芸

術大学の佐藤雅彦先生の研究会に参加させていただき、京都国立博物館の河原正彦先生、京都府立総合資料館の中ノ堂一信先生からも京焼について話を伺うことができました。そのようななかから、仁清の文献的研究という、ひとつの方向性が見つかりました。

●京焼研究を通じた人・ものとの出会い

修士課程終了後に、京都市社会教育振興財団(現・京都アスニー、生涯学習振興財団)の事業課で五年間、その後京都市歴史資料館で五年間『史料京都の歴史』の編纂に携わり、責任編纂者の林屋辰三郎先生や山路興造館長からご指導いただきました。これらの職場で、京都のことや、その歴史を一から学べたわけですが、仕事のなかで、実際にやきものを扱うことはできず、他に見る機会もありませんでした。資料館に移った頃でしたか、文献だけではやっていけないと、やきもの研究をやめてしまおうと思った時期がありました。しかし、ひとつだけ心残りがありました。丸亀藩京極家の道具帳に現存する仁清の色絵茶壺の記事があり、実際の茶壺を見ることが記事を読み込んで論文を書けるかもしれない、と思っていたのです。

ちょうどその頃、東京の若手学芸員の方々の研究会で道具帳の報告をする機会がありました。残る課題は仁清の茶壺を見ることがとお話したら、皆さんから「岡さん、一緒に見ましょう」と言っていただけなのです。その時に参加しておられた静嘉堂文庫美術館の長谷川祥子さん、出光美術館の荒川正明さん、文化庁

の斎藤孝正さんから仁清の茶壺を特別閲覧させていただき、さらに根津美術館の西田宏子先生、東京国立博物館の矢部良明先生や伊藤嘉章さんからも仁清茶壺を見せていただきました。最初は、本当にただ見ただけだったのですが、皆さんとお話することで「もの」の見方が少しずつ分かっていったように思います。

——仁清茶壺が先生に、多くの出会いをもたらしたのですね。

私は、何かをやるうとすると、必ず助けてくれる人に出会うという強運をもっているようです。九〇年代末頃ですが、京焼研究のためには、考古遺物を見なければならぬと思えました。その頃に豊島区遺跡調査会におられた鈴木裕子さんと出会い、東京大学（加賀藩邸遺跡）を始め、江戸遺跡の京焼調査に連れて行ってもらいました。しかし、このままだと、全国の遺跡を回るのに一生かかるなと思っていた頃、二〇〇〇年に滋賀県文化財保護協会におられた稲垣正宏さんと、大阪市文化財協会の佐藤隆さんとで、関西陶磁史研究会を結成することができました。最初から五年間精一杯活動すると決めて、関西中の遺跡を巡りました。年一回の研究集会では全国から研究者の方々が陶片を持参してくれました。ここでの考古学研究者との出会いは大きかったですね。

一九九五年に大手前女子大学（現・大手前大学）に職を得ることができましたが、当時、日本文化学科に切畑健先生、美術学科



に武田恒夫先生、史学科に熱田公先生や秋山進午先生が在職しておられ、学科の壁を超えて、先生方から話をうかがえました。学生に交じり、武田先生と切畑先生の特殊講義を聴講したこともありました。私はきちんと美術史を勉強したことがなかったもので、これは貴重な経験でした。

●ジャンルを超えた京焼研究のあり方

——京焼研究には多分野の研究が必要ですね。

陶磁器研究は、優れた伝世品を対象とする近代の美術工芸史から始まり、また文献をもとにした文化史や産業史などの歴史研究も行われてきました。戦後の高度成長期には窯跡などの生産地遺跡が発掘されるようになり、考古学の分野の研究も進みました。

しかし京都の窯跡は市街地にあるため発掘ができず、考古学の成果を取り入れることが困難でしたが、近年、江戸や京都、また地方の城下町遺跡などの消費地遺跡からの多くの京焼が出土してきました。その成果を取り入れ、従来の伝世品と文献をもとにした研究を見直した試論が、今回の著作にも含まれています。

——ジャンルを超えた研究を進める上で、難しい点はありませんか。陶磁器研究の場合、美術史・歴史学・考古学にまたがる学際研究ですが、どの分野に自分の軸足を置くかが大切だと思います。

そこがふらふらしていると、確実な成果を得ることができないと思います。私は文献研究に軸足を置いています、他分野を扱う

時には、研究方法を知るように努めています。たとえば、発掘報告書に京焼の出土した遺構の年代が記載されていれば、そのデータを丸写しにするのではなく、遺構年代を決める方法や根拠を踏まえるようにしています。また、伝世品でも遺物でも、何より、その場に赴き、実際に見ることが一番大切だと思っています。

—— 今回の研究では、海外にある京焼にも着目されています。

カナダのロイヤル・オンタリオ博物館の仁清の茶碗、アメリカカのフリーア美術館の三点の京焼作品を取り上げました。これらは取蔵庫に無造作に置かれていたものでしたが、海外調査で、このような新たな作品を発見することも、これからの課題ですね。

また最近、フリーア美術館が入手した、大名物の唐物茶壺「千種」について、永青文庫の竹内順一先生、学芸員のルイズ・コート先生、プリンストン大学のアンディ・ワツキーさんと調査研究を進めています。作品のみならず附属品の紐・覆・箱、添状にも注目し、「千種」を巡る日本人の様々な意識を明らかにしようとした意欲的なもので、今年八月二八日にネットでアメリカからオンラインセミナーを配信する予定です。詳細な個別研究では日本の方が研究は進んでいます。が、「日本文化とは何か」という大きな視座に立つ姿勢は、欧米の研究者に学ぶところが大きいと思います。

● やきもの研究の周辺で

—— やきもの研究以外で、現在進められていることはありますか。

歴史学から研究を始めましたので、「もの」を通じた文化史研究ができないかと考えています。文献から文化史を語ると、文化

の担い手は誰かというように、人間から見えてしまいがちです。では、「もの」が語る文化史は何かと問われると、答えに詰まるのですが、以前「寛永文化のネットワーク」(思文閣出版、一九九八年)に、江戸時代初期に道具(美術品)を取引した唐物屋と呼ばれる京都の商人たちについて「唐物屋覚書」という小稿を書きました。このような「もの」に関わる人々の動向を追い、彼らが扱う実際の「もの」は何か、それがどんな価値をもったかなどを分析することから、新しい方向性が見出せるようにも思います。

また、先にお話したやきもの研究に行き詰まった頃、仕事の関係で宝鏡寺門跡の文書を調査させていただく機会があり、やきもの以外であれば、尼門跡について勉強したいと思いました。ちょうどその頃、大学の先輩で相愛大学にいらした西口順子先生から、尼寺文書の調査を手伝って欲しいと依頼され、科学研究費を得、十数年にわたり、西口先生や仏教史の研究者の方々と中宮寺・光照院・靈鑑寺・慈受院門跡などにお願ひして文書調査を続けてきました。仏教史や女性史は専門外なのですが、やればやるほど面白い。というのは、一七世紀までさかのぼり、女性が女性のために自らの手で残した文書は、尼門跡文書以外にありません。これは日本の貴重なジェンダー史料です。世界的に見ても、中世ヨーロッパの修道院文書に匹敵する価値があります。私たちの世代では本格的な研究まで進められないと思いますが、これからの研究者のためにも、今やらねばならない基礎調査だと思っています。

松花堂昭乗研究と瀧本流手本の出版

山口 恭子

日本の書道史において、近世初期は特筆すべき時代だといえる。伝統の継承を重視した中世の書を一新するかのように、自由で新しい書文化が生まれていった。そのようななか、とくに際立った書活動を展開したのが、近衛信尹・本阿弥光悦・松花堂昭乗の三人である。彼らは後に「寛永の三筆」と称され、書道史上その名をとどめている。

そのなかのひとつ、松花堂昭乗は、石清水八幡宮瀧本坊の住持であった。青蓮院流・大師流・定家流などの書も残したが、とくに「瀧本流」「松花堂流」といわれる、独自の流麗でおだやかな書に特徴がある。その書は広く好まれ、やがて近世の書文化を席卷する一大書流へと成長していった。他方、昭乗は、絵や茶の湯、連歌等の文芸においても足跡を残し、小堀遠州・佐川田昌俊・林羅山・江月宗玩ら、寛永期の知識人たちとの親交を結んでもいた。書家としてはもちろんのこと、寛永文化の様相を考えるうえでも注目すべき存在といえよう。

三月に思文閣出版より上梓した拙書『松花堂昭乗と瀧本流の展開』は、松花堂昭乗、ならびにその書流瀧本流について論じたも

のである。とくに、昭乗の文事に関する検討、および瀧本流の近世における流行と展開に関する検討の二点をテーマとした。これまでの昭乗研究では、書画作品に即した美術史的検討や、書状等に基づく考察が多く提出され、その芸術や生涯が明らかにされてきている。一方で、昭乗の文芸作品や、瀧本流の手習い手本などに対する細やかな調査研究は、必ずしも十分に重ねられてきたわけではない。昭乗の文化活動や瀧本流の展開についてさらに解明してゆくために、拙書では、それらに対するとくに文献学的・書誌学的方法による研究を主眼とした。ことに、瀧本流の手習い手本の出版状況から書流の流行の様相を跡づけたら、昭乗の筆跡を収める名筆摸刻集『本朝名公墨宝』（三卷三冊、正保二年）の書誌的検討を行うなど、版本の資料に関する研究を中心に取っている。これは、瀧本流の展開が、出版と大きなかわりあいをもっていると考えられるからである。

近世、出版文化が飛躍的な発達を遂げたことは言をまたない。文学や学問、実用書など様々なものが開版されたが、その時流のなかで書もまた出版と結びついてゆく。瀧本流の手本も多く刊行

され、それらの存在は、昭乗の書を世の中に広く知らしめ、追隨者を各地に生み出すことに繋がっていった。また、日本における名筆模刻集の嚆矢『本朝名公墨宝』の存在も興味深い。日本書道史上有名な書家一六人の筆跡が収録された同書は、覆刻が繰り返されたいわばベストセラーであるが、とりわけ下巻全冊にわたって昭乗の筆跡を収めている点で注目する。昭乗の書を求める人々にとって、これも有益な手本であったことだろう。

瀧本流における手本の出版という観点でいえば、近世中期、拙書でもとりあげた細合半齋ほごはんさいの果たした役割は象徴的である。漢学者・漢詩人で瀧本流門人でもあった半齋は、書話『瀧本某』(寛政八年)を著述するとともに、多くの瀧本流手本を編纂し出版していた。手本によって享受の裾野を広げることが流派存続の鍵であると、彼自身考えていたと思しい。半齋は、昭乗が描いた自画像の摸写なども残しており、昭乗に対して敬慕の情を抱いていたことは明らかであるが、その思いを手本の編纂・出版にも込めたいたといえよう。実際、半齋の働きによって、それまで流行に翳りのみえていた瀧本流は、近世中期再興することとなる。

他方、拙書においてはほとんど触れられなかったが、今日伝わる手本には、無名の学習者たちの思い入れも映し出されている。実用書であるだけに、伝存する手本は擦り切れたり、破れたりしているものも多く、なかには、印面の汚れから、手本のうえに紙を敷いて影写をしたと想像できるものや、見返しなどに、教材に習って詩歌を書いたものもある。これらはいずれも、昭乗の筆法

を学んだ人々の熱意の証といえよう。もちろん、破れた箇所には補修が施されたものも少なくない。さらに、袋綴じを折帖仕立てに装訂しなおしたものや、やはり袋綴じを一度バラバラにし、書跡の収録順を変えて再度綴じなおした名筆集もあった。こうした、所蔵者が本をアレンジした痕跡からも、当時の人々の学書への積極的な姿勢がうかがえる。

このように、手本類の出版状況、そして、今日に伝わるそれらのありさまは、瀧本流の展開や享受に関し多くのことを示唆してくれる。それゆえに、私はその調査検討にこだわり続けてきたのであるが、一冊の本をまとめた今もその興味は尽きない。

瀧本流手本を手にした人々は、そのなかに、昭乗の書のみならず、昭乗の存在そのものをみてもいたであろう。書を鑑賞する、書を学ぶということとは、単に書かれた文字をみる、習うだけの行為ではなく、書き手に近づこうとする試みともいえるからである。こうした、昭乗の書や存在に寄り添おうとしていた人々の眼差しを通してこそ、近世に昭乗の芸術が愛された理由を探ることができるのではないだろうか。そうしたことを念頭におきながら、今後も諸資料と向かいあい続けてゆくつもりである。

(埼玉学園大学・都留文科大・法政大学非常勤講師)

ベルツとシヨイベ

森 本 武 利

エルヴィン・ベルツ（一八四九～一九一三）は明治九年から明治三五年まで、東京医学校、東京大学医学部のお雇い医師として二六年間にわたり多くの医師ならびに教育者を育て、「日本近代医学の父」と呼ばれている。

ベルツが来朝した翌年の明治一〇年（一八七七）、在ドイツ全権公使・青木周蔵の斡旋により、ベルツと同じライプツィヒ大学からポルト・シヨイベ（一八五三～一九二三）が京都療病院のお雇い医師として着任している。

シヨイベと同じ年にライプツィヒ大学を卒業してカール・ブンダーリッヒの内科学教室へ助手として入局し、のち学長をも務めた神経内科学のパイオニア、アドルフ・シュトリュンペルは、彼の自伝の中で、ベルツについて「当時ブンダーリッヒの第一助手を勤めていたE・ベルツが、常に心からなる助言者となってくれた」と述べている。また親しい関係を結ぶようになった友人の一人として「ブンダーリッヒの甥で、その後間もなく日本の京都の医学校に招聘され、帰国後はグライツの病院医に推挙され、最近惜しくも物故したB・シヨイベ」を挙げ、「彼は脚気病に関する

研究と、優秀な熱帯病教科書の公刊によって名声を得た、勤勉・努力型の少壮学徒であった」と述べている（高橋徳次訳『ドイツ医学の発展——シュトリュンペル自伝』牧書房、一九四三年）。

ブンダーリッヒの内科学教室からベルツとシヨイベが相次いで東京と京都にお雇い医師として来日したわけであるが、トク・ベルツ編の『ベルツの日記』（菅沼竜太郎訳、岩波書店、一九七九年）には、なぜかシヨイベの名前が全く出てこない。またベルツとシヨイベの研究内容に共通点が多いため、二人の関わり合いを調べてみたいと考えていた。

一九九七年にドイツを訪れた際、シヨイベの墓参を計画し、シヨイベのお孫さん達と逢う機会を得た。その際シヨイベが京都滞在中、母に送った手紙一一一通が残されていることを知り、その出版の承諾を得た。手紙は酒井謙一先生（京都工芸繊維大学教授）に訳出頂き、各種の資料と共に『京都療病院お雇い医師シヨイベ——滞日書簡から——』をまとめた。

シヨイベはアメリカ経由で日本へ向かい、明治一〇年一月八日に横浜へ到着した。彼は横浜からベルツに電報を打ち、ベルツ

はその日のうちに東京から横浜へ出迎え、この日から一四日までベルツ宅に滞在している。ベルツが去ってからのライブツィヒでの医学の進歩、二人の恩師ブンダーリツヒの消息、日本での医学教育や生活上のアドバイスなど、話に花が咲いたと思われる。

シヨイベは京都へ着任するとともに活動を始め、『常用方鑑』や新しく発刊された『療病院雜誌』に治験や新奇の学説を次々と発表している。一方ベルツは明治一二年一月一三日の日記に「今日で自分は三〇になる！三〇歳！しかも学術的には、まだ何の仕事もしていない」と記し、あせる様子がうかがわれる。

明治一二年四月の復活祭休暇にシヨイベはベルツを訪れ、共に江ノ島・鎌倉へ旅行している。またこの年の一月一四日から二三日にかけては、ベルツがシヨイベを京都に訪れている。この年の夏はコレラの流行のため祇園祭りが中止となり、銚の巡幸が一月に行われ、ベルツはシヨイベと一緒にこれを観覧している。銚巡幸の様子が『ベルツの日記』に詳しく述べられているが、ここでシヨイベの名前が出てこないのも不自然である。

明治一三年の復活祭休暇には、四月二二日から五月三日まで東京を訪れベルツ宅に滞在している。二三日には東京大学のお雇い医師で外科医のシュルツェ宅に、ベルツと共に招待されている。このときの様子をシュルツェ夫人エンマは「先週の火曜日にドクトル・シヨイベが京都からベルツを訪ね、八日間滞在の予定でまいました。（中略）私たちはお二人を金曜日の夕方、自宅へ来て頂きました。そして彼らは、医学の話になりましたので、私は

食事の後自分の部屋に引っ込んで新聞を読んでいました。彼らはヴィルヘルムの部屋で、夜中までこころ行くばかり語り合いました、それから私の部屋へやって来て言い訳をしました。当地で同士の土が集まることは、そうそうありませんので、許してあげました」と記している（トスカ・ヘゼキール編著、北村智明・小関恒雄訳『明治初期御雇い医師夫妻の生活——シュルツェ夫人の手紙から』玄同社、一九八七年）。

明治一四年の復活祭休暇もまた四月二一日から五月六日の間東京へベルツを訪れ、共に東京博覧会の見物などをしている。なおその帰路に横浜から脚気の論文をドイツへ発送しているが、論文についてベルツと意見を交わしたと考えられる。この年の一二月一日に京都府の財政事情から契約が打ち切られ、シヨイベは同月一九日より翌年の二月二〇日まで東京を訪れ、ベルツ宅に滞在して身の振り方について相談している。ベルツは近々休暇をとってドイツへ一時帰国するので、その間ベルツの代理をとる案を出したが、ベルツの帰国が先送りになり、この案は実現しなかった。ベルツとシヨイベは脚気や寄生虫などの医学研究のほか、民俗学や人類学分野でも、共に当時の最先端の業績を発表しており、互いに色々と情報交換をしていたことは間違いないさそうである。今のところ、この二人の関係が具体的に記された史料は、シヨイベの書簡のみであり、彼らの関係をめぐる想像は尽きない。

（京都府立医科大学名誉教授）

「過去」——この未知なる世界へ——ファン・ステーン・パール・ニールス

「The past is a foreign country: they do things differently there」。

このL・P・ハートリーの『The Go-Between』（一九五三年刊）の冒頭句は、過去を一種の外国と譬^{たと}えることによって、今を生きた私達とは異なるやり方と考え方が存在する場所であることを教えてくれる名言である。歴史学に関する記述でも、現在の常識を過ぎ去った昔に反映させること、いわゆる時代錯誤への戒めとして、よく引用される。既に多くの読者が感銘を受けたであろうこの冒頭句であるが、ここで私は「この文章の意味はいつまで読者に通用しうるものであろうか」という問いを投げかけてみたい。というのも、ハートリーの比喩が成立するための前提となる、「異なるやり方と考え方が存在する場所」としての「外国」がいまも存在するのだろうかという疑問があるからである。

ハートリーが主に人生を送った二〇世紀前半という時代には、帝国主義の名残の下、第一次・第二次世界大戦に挟まれ、「外国」というものが根本的に違う「異国」であると強く認識されていた。しかし戦後の著しい技術の発展、IT革命は国を超えて、人・モノ・金・情報といった様々なものの移動をより容易にした。店に

並ぶ商品、食べ物、ファッションは驚くほど共通化し、資本主義と民主主義というやり方と考え方も広く普及し、今や一種のグローバル文化をもたらしている。

そのグローバル文化の普及によって、「外国」は昔ほどには異国情緒を強く感じさせるものではなくなった。グローバル文化で育った日本人の若者が飛行機で「外国」となる現代オランダへ飛ぶか、「過去」となる大正時代日本へタイムスリップするか、どちらがより「異国」と感じるかといえば、大正時代の方かもしれない。いや、間違いなくそうであろう。現在では「外国」よりも、「過去」の方が「遠い」存在なのである。既にハートリーの比喩の前提が揺れているのだ。

グローバル文化の影響は教育の場でも確認できる。一つの例に過ぎないが、私自身が初めて日本語を耳にしたのは、オランダのライデン大学の日本学科に入学した二〇〇〇年であった。当時二〇歳だった私は「こんにちは」さえ知らなかった。同級生の中には基礎知識を持つ者もいたが、自分の世間知らずを気にさせるほどではなかった。しかし、それよりわずか七年後、私が教えるこ

ととなった一年生の日本語会話授業では、「普通」に日本語を話せる生徒が何人もいた。その語彙と口調はそれぞれの好みのアニメ・文学ジャンルによって少々偏ったものではあったが、話せることには違いない。その上、日本文化に関する知識も豊富であった。もちろんネイティブほどではないが、注目したいのはその後輩達は自分の日本語や文化についての知識や、クラスメート達のそれに関して、全く違和感を覚えず、「普通」だと感じていたことである。考えてみれば当然、デジタル社会とグローバル文化で育った彼らは、幼い頃からテレビであれ、インターネットであれ日本のアニメや映画を通して、日本の風景・しぐさ・ユーモアに知らず知らずのうちに親しんできたのである。日本に興味を持てば、さらなる情報を一瞬で入手でき、ビデオチャットを通して日本人と会話もできるのである。

ライデン大学に毎年入学する一〇〇人余りの学生は、こうした環境で育った。彼らにとつて、日本はエキゾチックで不思議な、遠い「異国」ではなく、むしろ極めて親しく、なじみ深い存在である。そんな後輩たちに直面し、私はグローバル化が進むスピードの妻まじさに圧倒されてしまった。

現在オランダで日本学を開講しているのは、ライデン大学のみとなつてしまった。しかしライデン大学では日本学の伝統が根強いため、相変わらずの人気を保っている。もとよりライデン大学の日本学はヨーロッパで最も早く設立され、その端緒は国王ウィレム三世がヨーハン・ヨーゼフ・ホフマンを日本学と中国学の教

授として任命した一八五五年にまでさかのぼる。江戸時代から出島を媒介に育まれた日蘭関係と、あのシーボルトやプロンホフなどが収集した豊富なコレクションの存在を考えあわせると、オランダにおける日本学のお厚い伝統は納得のいくものである。

ライデン大学は、この伝統を継承して、古代から現代までの思想・文学・文化・政治・社会といったフィールドを依然として研究し続ける一方、グローバル文化、またグローバル化された学生達に迎えようとしている。留学プログラムが充実しており、学部生・修士・博士をあわせて、毎年約四〇人が日本に留学している。東アジアを広い視点でみる国際的かつ学際的な研究や、漫画・アニメといった資料を有効に駆使できる方法論の模索も積極的に行われている。またもう一つ特筆すべき動きは「新日蘭辞典編纂プロジェクト」である。四〇〇年にも及ぶ日蘭関係にも関わらず、現代に通用する日蘭辞典がいまだないという大変残念な状態を改めるべく、オランダ政府の推奨の下、去年から開始された。日蘭関係や共同研究をまた一層飛躍させる計画として期待される。

もはやオランダと日本は、「外国」でありながらも「異国」ではない。ただし「過去」は相変わらず未知の世界である。その未知の世界との接近と解明については、今後の研究を待つのみである。いや、歴史学者としては待っているだけではすまない。自分自身が取り組んでいる課題なのだから。

(京都大学大学院教育学研究科博士後期課程)

史料

探訪

45

山奈宗真の「海嘯被害地巡回日記」

まえ
かわ
前川 さおり

(遠野市立博物館 学芸員)

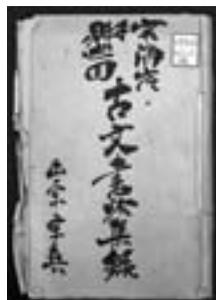
岩手県遠野市は、北上高地の中央に位置し、江戸時代には遠野南部家の城下町であり、盛岡市・花巻市・奥州市などの内陸部と、大槌町・釜石市・大船渡市・陸前高田市の三陸沿岸部から荷馬で約一日、今なら車で約一時間の距離にあつて、物資や情報・文化の集散地として栄えた。柳田國男の『遠野物語』にも「七つの溪谷各七十里の奥より売買の貨物を聚め、その市の日は馬千匹、千人の賑わしさなりき」と往時の様子が記されている。東日本大震災で大きな津波被害を受けた三陸沿岸部と遠野は、歴史的・文化的に深いつながりをもっていた。

三月二一日、遠野も震度五強の地震に見舞われた。遠野市立博物館は、幸いなことに観覧者や職員は無事で、施設には大きな被害はなかったが、市役所が全壊したのをはじめ、市内も大きな被害を受けた。停電・電話不通の中、ラジオだけが三陸沿岸部に大きな津波が襲ったことを伝えていた。沿岸部の家族や親戚、友人は無事だろうか、皆胸がつぶれるような心地だった。その夜から遠野市職員すべてが災害支援の職務に従事することになり、博物館も休館、再開したのは四月二二日だった。

再開にあつて、博物館ができることはないかと考え、思い浮かんだのが当館コレクションの一つである山奈宗真の明治三陸地震津波調査関係資料であつた。これらの中から二二点を選び、テーマ展「明治三陸地震津波と山奈宗真」遠野からのメッセージ」を七月一日まで開催している。

今回は、テーマ展に展示している「海嘯被害地巡回日記」を紹介する。この資料は、山奈宗真が明治三陸地震津波の被害調査を行った際の日記で、「岩手県海岸巡回古文書拾集録」というタイトルのついた洋野ノートに鉛筆書きで収録されているものがある。

山奈宗真(一八四七〜一九〇九)は、遠野南部家家臣の長男として遠野の城下に生まれた。父親から産業に従事せよとの教えを受け、剣道・砲術・和算・地理・測量などを学び、江戸や横浜にも遊学した。遠野周辺各地に牧場を開き、アメリカから乳牛を輸入・改良するなど牛馬の育成につとめ、養蚕を奨励して遠野製糸場を設立し、私設農業試験所でトマト・セロリなどの洋種野菜の栽培などを行った明治時代の起業家、岩手県内の殖産興業指導の先駆者として知られている。



「海嘯被害地巡回日誌」・「岩手県海岸巡回古文書拾集録」表紙
(遠野市立博物館蔵)

明治二九年（一八九六）六月一日、約二万二千人の人命を奪い去った明治三陸地震津波が発生した。その一ヶ月半後の「海嘯被害地巡回日誌」の七月二五日の項を見ると、

被害地調査ノ使ヲ本県ニ建議セシニ、御採用ノ模様ニ付（仮令採用無キ時ハ、自分ニテ巡回ノ見込ナレドモ今日民者ニテハ被害繁忙町役場充分便利覚束ナキ為メ本県ニ謀ル）書造リ差出シ。

とある。山奈は、かねてから津波被害調査員への採用を岩手県に志願していた。もし採用されない時は、個人の立場でも調査を行う気構えであったが、民間人が被害対応で忙しい町役場に行っても十分協力を得ることができないだろうと考えたのであった。この一文からは、津波被害調査への強い意志と、行政の「看板」のメリットを調査に活かそうとする山奈の優れたバランス感覚を見ることができるといえる。

七月二七日に岩手県の「海嘯被害地授産方法取調」の委嘱状を手にした山奈は、二八日に岩手県庁のある盛岡を出発し、途中遠野の自宅に立ち寄り、七月三〇日大船渡市盛町に到着する。被害調査は、七月三一日現在の陸前高田市気仙町から始め、沿岸をほぼ順に北上し、九月八日九戸郡洋野町種市で終わっている。山奈はこの広範囲を、約四四日間、ほとんど単身で行った。調査期間の半分は長雨に悩まされ、八月三一日の項には「田老川洪水大ニ困難セリ」とあり、宮古市の田老川で洪水が発生している。また同日の項には「本日地震強シ、午後四時頃山ナリアリ、不安夜数

回昼数回」という秋田県と岩手県の県境で発生した東北地方最大規模の内陸直下型地震「陸羽地震」についても記されていて、決して安全な調査行ではなかった。

山奈の調査は、単に被害状況を調べるだけのものではなかった。調査項目の中に「漁村ノ新位置」、「漁村挽回」、「漁民将来ノ企望」などの将来を見据えたものが設けられていることから、被災地域を巡回することにより、水産業復興につながる糸口を見出そうとしたと考えられる。また、津波浸水域を書き込んだ見取絵図も、山奈の測量が信頼できるものであることが現在検証されて、津波直後を精緻に記録した第一級資料として評価されている。

彼の調査記録は「岩手県沿岸大海嘯取調書」や「大海嘯見取絵図」などにまとめられるが、当時はあまり活用されず、明治三六年（一九〇三）に帝室図書館（現・国立国会図書館）に寄贈された。遠野に残されたのは、その下書き原稿などの一部の資料である。

津波調査を行った当時、山奈宗真は四九歳。彼の行動力と頑健な精神には驚かされる。だが彼を突き動かした想いが、今ほど理解できる時もないだろう。彼と同じ想いを抱いて多くの人々が、復興に向けて動き始めている。

岩手県内の博物館のうち、筆者が知る限りでは、陸前高田市立博物館、陸前高田市海と貝のミュージアム、山田町立鯨と海の科学館、久慈市地下水族科学館（もぐらんぴあ）が津波を受けて壊滅した。津波の犠牲になった職員もいる。だが、生き残った職員

たちが自らも被災しながら、貴重な資料をレスキューし、残そうと懸命に活動している。被災地に近い遠野市のみならず、県内博物館・教育委員会の職員たちも、それぞれの専門分野を活かして支援にあたっている。県外の博物館や大学の支援も始まっている。ガレキと土砂の中から資料を引出し、集め、安全な場所に移送し、保存処理し、分類整理し、目録を作り、しかるべき場所で保管・展示公開する。その道のりはまだ遠い。しかしそれは被災地の人々に寄り添いながら、その意志を尊重して行われるべきものである。なぜなら、地域の人々によって救い出された文化財は、大震災を乗り越えたという新たな歴史的価値を与えられ、大きな誇りをもって後世に伝えられるはずだから。

遠野市立博物館

岩手県遠野市東館町3-1-9 Tel.01998-6212340

— MEMO —

- ・JR釜石線遠野駅から徒歩8分
- ・入館料 一般310円、高校生210円、小中生150円
- ・開館時間 午前9時～午後5時
- ・閉館日 月末日、11月～3月の月曜日、資料特別整理期間（11月24日～30日、1月28日～31日）

【開催中】（テーマ展） 2011年7月11日（月）

「明治三陸地震津波と山奈宗真～遠野からのメッセージ～」

※山奈宗真の津波被害調査資料22点を展示

書評・紹介一覧 4～5月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事 [敬称略]
日中戦争から世界戦争へ (紹)『日本歴史』第755号(佐藤元英)	日本文学の「女性性」 (紹)週刊読書人 4/1	
鉄道日本文化史考 (評)紀伊国屋書評空間BOOKLOG 4/30(辻泉)	(評)ふえみん婦人民主新聞 5/5	
明治前期の教育・教化・仏教 (紹)Japanese Journal of Religious Studies 38/1 (Klautau, Orion)	いけばなにみる日本文化 (記)中国新聞 4/3(佐田尾信作)	
江月宗玩 欠伸稿注 乾 (紹)『史学雑誌』第120編第4号(齊藤夏来)	(紹)『フローリスト』5月号 (紹)『挿花』(小原流)5月号 (紹)『広島芸術学会会報』第112号	
中国語圏における厨川白村現象 (評)『比較文学』第53巻(大東和重)	藤村庸軒をめぐる人々 (紹)『茶華道ニュース』第669号	
明治期における不敬事件の研究 (評)『教育学研究』第78巻第1号(小野雅章)	近世京焼の研究 (紹)京都市報 4/24(木立雅朗)	
一体派の結衆と史的展開の研究 (紹)『地方史研究』第350号(家塚智子)	松花堂昭乗と瀧本流の展開 (評)『月刊美術』第428号 (紹)『墨』第210号	
茶譜 (紹)『淡交』4月号	大本山くろ谷 金戒光明寺 宝物総覧 (紹)中外日報 4/26 (紹)『紫雲』第407号	

4月から5月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
大本山くろ谷 金戒光明寺 宝物総覧	浄土宗大本山くろ谷金戒光明寺発行	1564-5 C1015	29,400	4
同志社女学校史の研究	宮澤正典著	1574-4 C3037	2,940	4
日本近世の宗教と社会	菅野洋介著	1572-0 C3021	8,190	4
天龍寺文書の研究	原田正俊編	1571-3 C3021	14,700	4
船簞笥の研究	小泉和子著	1503-4 C3039	6,300	5
東寺文書と中世の諸相	東寺文書研究会編	1578-2 C3021	11,550	5
一六世紀イングランド農村の資本主義 発展構造	松村幸一著	1575-1 C3022	14,700	5
京都療病院お雇い医師シヨイベ	森本武利編・酒井謙一著	1581-2 C3047	7,350	5
中近世農業史の再解釈	伏見元嘉著	1562-1 C3021	8,190	5

4月から5月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
金鱗叢書	37	37	ビーコンヒルの小径	1573-7-C3370	8,925	4
新島襄を語る	8	8		1576-8 C1016	1,995	4
尾陽	7	7		1577-5 C1370	3,150	4
花園院宸記	20	29		1582-9 C3321	399,000	5

(表示価格は税5%込)

▼朝日新聞が紙面をデジタルで配信するサービスを始めたということで、早速試してみました。横書きなのに加えて、早速試してみたら、低い一覧性など、どうにも違和感があり、少なくともそこには読む楽しみがありません。かくしてわが家の朝に、紙をめぐる音が復活したのでした。

一方で、全米アカデミー出版局が、発行図書のPDF版四〇〇以上を無料公開のニュース。紙とデジタルの手を結ぶべきところが見えてきたように思います。(h)

☆フェア情報

ジュンク堂書店新宿店(東京都新宿区)

歴史書懇話会フェア

「激動の昭和・15年戦争」

7月15日まで

琉球大学生協中央店(沖縄県中頭郡)

歴史書懇話会フェア

7月31日まで

☆イベント情報

東京国際ブックフェア(東京ビックサイト)

7月7日(木)～10日(日)

歴史書懇話会のブースにて、小社刊行図書の一部を展示、販売いたします。ぜひ、お立ち寄り下さいませ。

▼エピソード満載の岡先生、収録中も仕事をしているのを忘れるぐらい引き込まれました。やきものを通じた、ある出会いから次の出会いへと紡がれる出来事の一つ一つ、それ自体が現代の文化史の一端を織りなしているようで、わくわくしました。(大)

▼戦国武将など25名の行動記録といえる『織豊期主要人物居所集成』は事前の問い合わせも多く、織豊期研究の必携書となる予感。しかし気弱な小社、刷り部数は控えめです。ぜひ品切れ前にお買い求め下さい！(M)

▼引越しには大変な労力が要りますが、気分の高揚するものでもあります(お前だけだと言われそうですが)。6月27日より社員一同、新しい場所での心機一転頑張りますので、ご愛顧のほどよろしく願っています。(須)

▼小社の新刊案内ダイレクトメールが被災地域の営みの励みとなると信じ、郵送可能地域全域に実施いたしました。一日も早い復興を祈念いたします。(江)

▼梅雨に入り、暑さにやられそうになっています。気分転換も兼ねて引越しを考えておりますが、なかなか上手いきません。(I)

▼表紙図版・井口常範『天文図解』所収の渾天儀／二八世紀日本の文化状況と国際環境』より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん
鴨東通信 四季報 No.82

2011(平成23)年6月27日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

仁明朝史の研究

にんみょうちよう
にんみょうちよう

〔3月刊行〕

承和転換期とその周辺

角田文衛監修／財団法人古代学協会編

仁明天皇（在位八三三〜八五八）の時代は、平安京が安定するとともに「初期摂関政治」が姿を現し、和歌、楽舞、仏教儀式などが新たな装いを見せ、「国風文化」への地均しが行われた時代であった。文献史学・考古学・美術史など各分野から気鋭の研究者を集結し、仁明朝の歴史の意義を多角的に解き明かし、日本国内のみならず東アジア世界の動向とも関連づける。

第一部

九世紀東部ユーラシア世界の変貌 山内晋次（神戸女子大学准教授）

―日本遣唐使関係史料を中心に―

九世紀の調庸制―課丁数の変化と偏差― 吉川真司（京都大学教授）

「化他」の時代 佐藤泰弘（甲南大学教授）

―天長・承和期の社会政策と仏教― 堀裕（東北大学准教授）

平安京野寺（常住寺）の諸問題 西本昌弘（関西大学教授）

第二部

銭貨と土器からみた仁明朝 高橋照彦（大阪大学准教授）

造瓦体制の変革期としての仁明朝 網伸也（京都市埋蔵文財研究所）

定額寺の修理と地域社会の変動 菱田哲郎（京都府立大学教授）

承和期の乾漆併用木彫像とその後の展開 根立研介（京都大学教授）

平安時代前期の陵墓選地 山田邦和（同志社女子大学教授）

斎宮・離宮院変遷の歴史的背景 山中章（三重大学教授）

―離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢神宮―

▼A5判・三五〇頁／定価七、三五〇円

歴史のなかの天皇陵

高木博志・山田邦和編

各時代に陵墓がどうあり、社会のなかでどのように変遷してきたのか、考古・古代・中世・近世・近代における陵墓の歴史をやさしく説く。研究者・ジャーナリストによるコラムや、執筆者による座談会も収録。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

日本古代都市史研究

堀内明博著

古代王権の展開と変容

長岡京の東宮と左京東院、平安京の条坊と市・町の形態、宅地と建物配置などの王朝都市から、白河・鳥羽殿、源氏・平氏の館などの中世前期都市まで、都城の展開と変容過程を時系列的に分析し、古代王権のあり方を考古学の成果を踏まえて解明した一書。

▼B5判・五一四頁／定価一五、七五〇円

埴仏の来た道

後藤宗俊著

白鳳期仏教受容の様相

粘土を型押しして作られた仏像「埴仏」。インドから中国を経て白鳳時代の奈良・飛鳥に招来され、大分・宇佐市にまわって出土する。この「埴仏の来た道」を丹念にたどり、そこにこめられた祈りの諸相を明かし、その途上に浮かび上がる玄奘・道昭・法蓮などの僧の信仰と人間像に迫る。

▼A5判・三二〇頁／定価五、九八五円

中野玄三著

続日本仏教美術史研究

▼A5判・五〇〇頁／定価一一、五五〇円

続々日本仏教美術史研究

▼A5判・八二〇頁／定価一七、八五〇円

東京国立博物館古典籍叢刊

九条家本延喜式(全五巻)

第一回配本(一) 巻一・二・四・六・七甲・七乙
〔7月刊行予定〕

▼A5判・四六〇頁／定価一五、七五〇円

本書の特色

- ・東京国立博物館所蔵の国宝・九条家本延喜式を、紙背文書も含めて写真版で影印出版
- ・朱書きがある箇所は二色刷とした
- ・紙背文書には新撮の高精細画像を使用
- ・第五回配本に九条家本延喜式の解説と紙背文書全点の翻刻を付す
- ・写真版に延喜式の条文番号・項目頭注を付し、各巻末に項目索引を収載した
- ・紙背は横長で掲載し、できるだけ一文書を二頁でみるように工夫した

続刊 ▼平均五〇〇頁・予価(各)一五、七五〇円

- (一) 巻八〜十一 平成三年 九月刊行
- (二) 巻十二・十三・十五・十六・二十〜二十二 平成三年一月刊行
- (三) 巻二十六〜三十一 平成四年 一月刊行
- (四) 巻三十二・三十六・三十八・三十九・四十二 平成四年 三月刊行

東京国立博物館古典籍叢刊

続刊予定

編集委員

- 国宝 元暦校本万葉集 高橋裕次 (東京国立博物館)
- 国宝 元永本古今和歌集 田良島哲 (東京国立博物館)
- 国宝 寛平御時后宮歌合 富坂賢 (東京国立博物館)
- 国宝 三宝絵詞 田島公 (東京大学史料編纂所)
- 群書治要 月本雅幸 (東京大学人文・社会科学研究所)
- 吉岡真之 (東京大学史料編纂所)

日本古代典籍史料の研究

〔3月刊行〕

鹿内浩胤著

史書・法制史料・儀式書・部類記など歴史学の土台をなす日本古代史の基本史料を対象に、原撰本へ如何にして接近するか、伝来論的アプローチを中心に「文献学的研究」と「書誌学的研究」の二部構成で研究の方法論を提示する。

前編 文献学的研究

- 第一章 『続日本後紀』現行本文の成立過程
- 第二章 『弘仁式』篇目考
- 第三章 田中教忠旧蔵『寛平二年三月記』について
- 後編 書誌学的研究
- 第一章 九条家本『延喜式』の書写年代
- 第二章 東山御文庫十一冊本『類聚三代格』について
- 第三章 伏見宮家本『東宮御元服部類記』について

▼A5判・三七六頁／定価七、〇三五円

奈良朝人物列伝 『続日本紀』薨卒伝の検討

林陸朗著

『続日本紀』撰者の批評的記事を交えて極めて特色ある史料として注目される54の全薨卒伝を、現代語訳・訓読・原文・語句解説・考察で構成。

▼A5判・四六八頁／定価七、三五〇円

日本政府が、ユネスコの「世界記憶遺産」に『御堂関白記』を推薦! (2011年5月)

御堂関白記全註釈 〔第2期・全8冊〕

山中裕編

本全註釈は永年にわたる講読会(東京・京都)と夏期の集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。

〔全巻完結〕 ▼A5判・総一〇三〇頁／定価(揃)五三、〇二五円

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会編

〔5月刊行〕

日本の古文書を代表する史料群であり、中世の基本史料である東寺文書。本書は、東寺文書に魅せられた中世史研究者により、一九九四年以降続けられた東寺文書研究会での研究成果の第2弾。研究会の報告を基礎に最新の成果を披露した19篇。

《Ⅰ 東寺の僧侶、その職位とはたらき》

永久元年の真言宗阿闍梨と東寺定額僧

年行事と案文

真木隆行（山口大学准教授）
宮崎肇（早稲田大学非常勤講師）
岡本隆明（京都府立総合資料館）

《Ⅱ 荘園、そして荘園史料からの発展》

土地範疇と地頭領主権

保立道久（東京大学史料編纂所教授）
志賀節子（関西大学非常勤講師）
村井祐樹（東京大学史料編纂所助教）

地下請小考

高橋傑（慶應義塾普通部助教）
清水克行（明治大学准教授）

周防国美和荘兼行方の年貢取取について

新見荘祐清殺害事件の真相

備中国新見荘における代官新見国経期の公用京進と商人の活動

辰田芳雄（岡山県立朝日高校教諭）

室町期東寺の寺院運営に関わる夫役と膝下所領

西尾知己（日本学術振興会特別研究員）
西谷正浩（福岡大学教授）
大山喬平（京都大学名誉教授）

中世後期における村の惣中と庄屋・政所

《Ⅲ 権力の裁許、政治勢力の地域的展開》

六波羅探題における「内問答」と「言口法師」

酒井紀美（茨城大学教授）
亀田俊和（京都大学非常勤講師）
山田徹（京都大学助教）

親応の擾乱以降の下文施行システム

室町期越中国・備前国の荘郷と領主

戦国期西播磨における地域権力の展開

渡邊大門（大阪観光大学客員研究員）

《Ⅳ 史料の性格の読解》

東寺宝蔵の文書の伝来と現状

新見康子（東寺宝物館）
「東寺長者補任」の類型とその性格

高橋敏子（東京大学史料編纂所准教授）
山家浩樹（東京大学史料編纂所教授）
「延文四年記」記主考

東寺百合文書

既刊8冊

京都府立総合資料館編

〔年1回刊行〕

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（平成九年国宝に指定）。本史料集には「ひらかなの部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナの部」を翻刻。

▼A5判・平均四五〇頁／定価（各）九、九七五円

東寺・東寺文書の研究

上島有著

〔第21回角川源義賞受賞〕

近世文書や聖教類も含めた東寺文書の整理の歴史を、東寺と東寺文書の研究に永年携わってきた著者が、寺史や伝来とも関わらせて集大成する。

▼A5判・八七二頁／定価一七、八五〇円

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録などの史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化した一書。本来の保管形態を復元し、伝来を確定して位置付けをしなす。カラー口絵4頁・本文挿入図版80点。

▼A5判・六三四頁／定価二二、六〇〇円

増補 南北朝期公武関係史の研究

森茂暁著

南北朝期の公家政局の構造、朝廷と幕府との関係を、豊富な史料から実証的に読み解き、のちの中世政治史の発展を決定づけた名著を増補・改訂して復刊。32頁の新補注を増補し、新しく見いだされた基礎データ等を収録。

▼A5判・六一二頁／定価九、四五〇円

天龍寺文書の研究

原田正俊編

【5月刊行】

京都叢殿の名刹・天龍寺の古文書は、仏教史・寺院史のみならず多数の朝廷・幕府発給の文書、荘園関係文書を含み、政治史・社会経済史研究に必須の文書群である。鎌倉時代～慶長5年の中世天龍寺関係文書および関連諸塔頭文書を翻刻、研究編として解説・論考を収録。重書案の骨子目録を付す。

● 内容目次 ●

第一部 文書編	第二部 研究編
天龍寺文書 (天龍寺・臨川寺・宝篋院文書)	天龍寺文書の構成と内容 (原田正俊・関西大学教授)
鎌倉・南北朝時代 三〇〇通	天龍寺・臨川寺・善入寺の所領について (地主智彦・文化庁美術学芸課文化財調査官)
室町時代 二六五通	天龍寺・臨川の寺辺・近傍所領 (玉城玲子・向日市文化資料館学芸員)
戦国時代 八二通	世良親王遺領と臨川寺の創建 (中井裕子・関西大学大学院博士後課程)
織豊時代 一五二通	天龍寺塔頭寿寧院の文書と所領 (勝野一裕・尼崎市教育委員会学芸員)
付録 関連書塔頭文書	天龍寺塔頭寿寧院の文書と所領 (勝野一裕・尼崎市教育委員会学芸員)
寿寧院文書 五通	戦国・織豊期の天龍寺諸塔頭について (伊藤真昭・善隆寺住職・大谷大学非常勤講師)
某院(寿寧院)文書 一通	重書案文の骨子目録
真乘院文書 一三三通	
慈濟院文書 五通	
妙智院文書 一五通	

▼A5判・七二〇頁／定価一四、七〇〇円

鹿王院文書の研究

鹿王院文書研究会編

足利義満を開基・春屋妙葩を開山とする臨濟宗寺院の鹿王院所蔵の中世文書約九〇〇点を収録。あわせて解題・研究篇を付す。

▼A5判・五三〇頁／定価一三、六五〇円

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

【第六回全国大学国語国文学会賞受賞】

一休没後も存続した一休派の結衆とその史的展開を解明することで、中世末期の寺院研究史上の欠如を埋める。一休の印可・法嗣否定による法統断絶の危機、大徳寺復興や在俗信仰者の結衆の問題などを扱う。

▼A5判・二七〇頁／定価八、一九〇円

相国寺蔵 西笑和尚文案

自慶長一年至慶長十二年

伊藤真昭・上田純一・原田正俊・秋宗康子編

豊臣秀吉・徳川家康のブレイクとして、寺社政策・外交政策に辣腕を發揮した相国寺中興の祖・西笑承兌の発給した書状の文案をまとめた『西笑和尚文案』全一〇冊を、紙背文書も含め初めて活字化。

▼A5判・二九六頁／定価七、三五〇円

中世寺院社会の研究

思文閣史学叢書

下坂守著

比叡山延暦寺を主たる対象とし、惣寺・僧侶たちによる合議を基礎単位とした中世寺院の広がりや寺院社会として捉え、その歴史的な意味を考察。惣寺がいかなるものであったかはもとより、惣寺を基盤として形成されていた寺院社会、ひいては中世社会の本質を探る。

▼A5判・五九八頁／定価一〇、二九〇円

南都寺院文書の世界

勝山清次編

東大寺宝珠院・法華堂文書・宝珠院文書と興福寺一乗院坊官二条家(一乗院文書・一乗院御用日記)に伝来した文書の調査・研究成果。論考八篇と史料翻刻三篇収録。

▼A5判・三三〇頁／定価六、〇九〇円

戦国期権力佐竹氏の研究

佐々木倫朗著

室町期から戦国時代に

かけて常陸国佐竹氏が
どのような過程を経て
権力形成を行ったの
か、一族衆や国衆等の
活動、佐竹氏と地域社
会との関わりやその地
域編成について、佐竹
氏が発給した「知行充
行状」・秋田藩家蔵文
書等の史料を通じて考
察することで、従来捨
象されがちであった戦
国期の権力編成の姿を
浮き彫りにする。

第1章 戦国期権力佐竹氏の成立過程

佐竹義舜の太田城復帰と「佐竹の乱」
永正期における佐竹氏の下野出兵
佐竹氏の小田進出と越相同盟

第2章 佐竹氏の権力構造と三家の活動

佐竹氏の南奥支配と東家義久の活動
北家義斯の活動
三家の政治的位置

第3章 佐竹氏権力の地域編成

佐竹氏領国内編成の地域的偏差
佐竹氏の陸奥・南郷経営
佐竹氏の南奥進出と船尾氏の存在形態

ささき・みちろう：一九六六年静岡県生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退、博士（文学）。大正大学文学部准教授。

〔4月刊行〕

▼A5判・三〇〇頁／定価六、〇九〇円

戦国大名武田氏の権力構造

丸島和洋著

戦国大名はどのような伝達ルートを通じて家中の内外との意思の疎通を行ったのか？本書は甲斐武田氏を分析対象とし、家中を代表して他大名との外交を担った「取次」に着目。領国支配における意思伝達経路の検討とあわせて、大名権力の中枢を構成する家臣や、大名と家臣の関係について見つめ直し、戦国大名の権力構造を明らかにする。

〔3月刊行〕

▼A5判・四三六頁／定価八、九二五円

瀬戸内海地域社会と織田権力

橋詰茂著

特産物の塩、周辺物資の海上輸送、在地権力の動向、海賊衆や真宗勢力の台頭など、瀬戸内・四国をとりまく実態を解明。〔内容〕瀬戸内海社会の形成と展開／瀬戸内海社会の発展と地域権力／地域権力と織田権力の抗争

▼A5判・三九六頁／定価七、五六〇円

戦国大名の外交と都市・流通

豊後大友氏と東アジア世界

鹿毛敏夫著

西日本の戦国大名のアジア外交の実態とそこに潜む意識構造について解明するとともに、西国大名による都市・流通政策の実態を解明。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、七七五円

中世後期の寺社と経済

鍛代敏雄著

石清水八幡宮と本願寺教団を主な対象とし、寺領・社領を中心に論じられてきた寺社と経済をめぐる問題に商業史・交通史・都市史の視角から迫り、中世後期の社会経済の変革の実態を具体的に描き出す。

▼A5判・四〇四頁／定価八、四〇〇円

室町・戦国期研究を読みなおす

中世後期研究会編

若手研究者が提示する研究の過去・現在・未来
〔内容〕政治史を読みなおす（公武関係を読みなおす・都鄙関係を読みなおす）／社会史を読みなおす／経済史を読みなおす／宗教史を読みなおす

▼A5判・四〇八頁／定価四、八三〇円

一八世紀日本の

文化状況と国際環境

笠谷和比古編

7月刊行予定

日本の一八世紀社会は、儒学・文学・博物学・蘭学等各分野において多くの成果を生み出し、近代化に多大な影響を与えた。それはいかにして形成され、どのような影響を受けつつ、展開を示したのか。多角的にアプローチした国際日本文化研究センターの共同研究成果。

内容

【序論】笠谷和比古 ◆一八世紀日本の「知」的革命 Intellectual Revolution
 【思潮】宮崎修多 ◆江戸中期における擬古主義の流行に関する臆見／竹村英二 ◆太宰春臺における古文の「體」法／重視／前田勉 ◆一八世紀日本の新思潮／フレデリック・クレインス ◆蘭方医が受容した一八世紀の西洋医療／松山壽一 ◆昌益とシェリング／和田光俊 ◆享保期における改暦の試みと西洋天文学の導入／小林龍彦 ◆漢訳西洋曆算書と『天学雜録』(経済と社会) ◆長谷川成一 ◆一八世紀新興問屋商人の広域的活動とネットワーク／平井晶子 ◆東北農村における家の歴史人口学的分析／藤實久美子 ◆江戸書物問屋の仲間株について／ヘルベルト・ブルトチョウ ◆江戸時代の日本人は日本をどう発見したか【文化の諸相】 武内恵美子 ◆熊沢蕃山の衆思想と一八世紀への影響／小林善帆 ◆一八世紀のいけ花／森田登代子 ◆大嘗会再興と庶民の意識／魚住孝至 ◆一八世紀における武術文化の再編成／郡司健 ◆享保期の異国船対策と長州藩における大砲技術の継承【国際交流】 武井協三 ◆歌舞伎と琉球／中国／真栄平房昭 ◆琉球の中国貿易と輸入品／平木實 ◆一八世紀朝鮮国の儒学界とそれがみた日本の儒学／高橋博巳 ◆ソウルに伝えられた江戸文人の詩文／岩下哲典 ◆一八世紀／一九世紀初頭ににおける露・英の接近と近世日本の変容／佐野真由子 ◆引き継がれた外交儀礼

かさや・かずひこ…京都大学大学院文学研究科博士課程修了(国史学)。
 現在、国際日本文化研究センター教授。

▼A5判・五五〇頁／定価八、九二五円

「公家と武家」全5冊シリーズ



国際日本文化研究センターで行われた公家(貴族)と武家に焦点を合わせた共同研究成果シリーズ。武士層が成長した地域と、文官支配が優越した地域との差異に着目。前近代社会における支配エリートであったそれらの身分や職能のもつ意味、その秩序の形式、社会的役割といったものを多角的に検討した論集。

- 公家と武家 その比較文文史的考察 村井康彦編
 九九九年刊 ▼A5判・四四四頁／定価八、一九〇円
- 公家と武家Ⅱ「家」の比較文文史的考察 笠谷和比古編
 九九九年刊 ▼A5判・五三〇頁／定価九、八七〇円
- 公家と武家Ⅲ 王権と儀礼の比較文文史的考察 笠谷和比古編
 二〇〇六年刊 ▼A5判・四五八頁／定価八、一九〇円
- 公家と武家Ⅳ 官儀制と封建制の比較文文史的考察 笠谷和比古編
 二〇〇八年刊 ▼A5判・五四四頁／定価八、九二五円
- 公家と武家の比較文文史 国際シンポジウム 笠谷和比古編
 二〇〇五年刊 ▼A5判・四九〇頁／定価八、四〇〇円

近世東アジア海域の文化交流

松浦章著

古来、東アジア海域を舞台にした人や物の交流で活躍したのは、中国帆船であり、その状況は汽船の登場まで変わらなかった。本書はおもに清代帆船の活動に注目して、日本・中国・朝鮮・琉球をはじめとした東アジア諸国の交流の諸相を明らかにする。

▼A5判・四七二頁／定価九、四五〇円

長崎奉行の研究

鈴木康子著

十七世紀後期から十八世紀中期の約百年間の、長崎奉行の職掌や幕府内における長崎奉行の位置づけの変化、そして長崎奉行自体の特質が変質してゆく状況を解明し、その背景となる幕府の経済政策の推移や、日本側の外国人に対する意識の変化などについても考察を加える。

▼A5判・四二〇頁／定価六、五一〇円

岡佳子著

近世京焼の研究



色絵秋草文 德利

◎近世の京焼、すなわち桃山時代から江戸時代末まで京都で焼かれたやきものの窯業の変遷を文献史料と出土資料から明かし、そこに京焼の名工たちの生涯と作品を位置づけ、その特質を明確にした。
◎名工たちの陶業を産業としてとらえ、技術の承継や産業的な展開、受容層のあり方、流通・市場の動向などの視点から京焼陶工の実態やその作風、あるいは京焼の通史を見直した一書。

目次

序◆「京焼」研究史をめぐって

第一部「京焼」の創始と諸国のやきもの

一◆京焼の黎明―軟質施釉陶器の時代―

二◆桃山から江戸時代初期の茶陶流通と京都

第二部 京焼窯場の成立と仁清

三◆登窯の導入と内窯窯場の展開

四◆京焼の茶入

五◆京焼のなかの高麗茶碗

六◆京焼のなかの御山焼―仁清色絵茶碗を中心に―

第三部 京焼の展開と乾山

七◆前期清水焼の諸相

八◆京焼色絵の展開―いわゆる「古清水」をめぐって―

九◆京焼のなかの乾山焼

第四部 後期京焼の諸相

十◆後期京焼の胎動

十一◆後期清水焼の変遷

十二◆京焼における復古と創造

十三◆京焼陶工と国焼

おか・よしこ：一九八一年年京都市女子大学大学院文学研究科修士課程修了。
二〇〇八年博士(芸術学) 筑波大学。現在、大手前大学総合文化学部教授。

【3月刊行】

▼A5判・四三四頁／定価六、六一五円

松花堂昭乗と

瀧本流の展開

山口恭子著

【3月刊行】

瀧本流の書について、造型的な面のみならず、昭乗の著述した文芸作品、瀧本流の法帖など、文献資料や版本に対する細やかな検討を行うことにより、近世の書道史、出版史、文化史など広範な研究分野に新しい知見を提供する。

第一部 松花堂昭乗の伝と文書

一◆「芳野道の記」善本考

二◆「松花堂画帖」の刊行をめぐって

三◆佐川田昌俊「松花堂行状」について

第二部 瀧本流の流行と展開―法帖の出版状況を中心に―

一◆瀧本流の流行と展開

二◆「本朝名公墨宝」の編纂と受容

三◆「本朝名公墨宝」諸版考

四◆「本朝名公墨宝」書誌解題稿

五◆細合半齋と書肆藤屋弥兵衛―瀧本流中興の背景―

第三部 松花堂昭乗年譜稿

やまぐち・きよつこ：二〇〇五年法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻博士後期課程修了。現在、都留文科大学文学部非常勤講師ほか。

▼A5判・三五六頁／定価九、〇三〇円

近世琵琶湖水運の研究

杉江進著

古代以来、全国流通路の中でも重要な位置を占めていた琵琶湖水運の近世について、より歴史的な視点からその全体像や特徴を描き出す。著者が琵琶湖水運史上重要な湊の自治体史編纂に関わる中で出会った史料と丹念に向き合い、あたたためてきた研究成果。

▼A5判・四六四頁／定価九、四五〇円

船簞笥の研究

小泉和子著

近世海運において船乗り達が船内に持ち込んで使っていた収納家具、船簞笥。本書はその成立から終息までを歴史的に考察し、デザイン形成を検証の上、その本質を明らかにする。様式史としてはなく、船簞笥自体を歴史を語る史料として試みた意欲的な一書。

(口絵カラー4頁・モノクロ4頁)

【5月刊行】
図版篇写真二〇四点掲載

▼A5判・四一〇頁／定価六、三〇〇円



第一章 船簞笥とは何か

第二章 船簞笥の様式形成と豪華形の出現

第三章 船簞笥の地域的差異と産地

第四章 豪華形船簞笥と北前船

こいずみ・かづこ

一九三三年生。東京大学建築史研究室で日本家具・室内意匠史を研究し工学博士号。昭和のくらし博物館館長。家具道具室内史学会会長。

祈りの文化 大津絵模様・絵馬模様 信多純一著

江戸時代から近江大津にて作られ、土産として全国で愛された民画・大津絵。その多彩な信仰、祈り、教訓、遊びの画題は、人々の想念の数々を端的に映し出す―その起源・絵馬との共通点・画題の意味など考察し、多数の図版で解説した全大津絵事典。

▼B5判・一七八頁／定価三、六七五円



応用美術思想導入の歴史

天貝義教著 ウイーン博参同より意匠条例制定まで

応用美術思想がいかに学習され、明治期の美術・工芸界に指導的役割を果たしたか。

▼A5判・四一〇頁／定価七、八七五円

鉄道日本文化史考

宇田正著

鉄道が「文化の鏡」として日本人の内面的形成に果たした文化的役割を解明。

▼A5判・三五二頁／定価五、七七五円

祭りのしつらい 町家とまち並み

岩間香・西岡陽子編／京極寛写真

各地の祭り飾りや造り物など、町家とまち並みを飾る祭りを文化を図版で紹介。

▼B5判・二三四頁／定価二、三二〇円

藤村庸軒年譜考 [全2冊]

白奇顕成著

庸軒の生涯の動向を、文献学的方法で歳ごとに明かした異色の年譜考。

▼A5判・一八四八頁／定価三六、七五〇円

入門 奈良絵本・絵巻

石川透著

御伽草子、王朝物語など、広範なその世界を簡単な解説とカラー写真で紹介。

▼B5判・一二六頁／定価二、一〇〇円



法然伝承と民間寺院の研究

平祐史著

◆民間の浄土宗寺院に伝わる宗祖伝承や史料、民俗信仰の融合・統合、異義・異安心(異端)などを考察。
◆法然ゆかりの総本山知恩院に所蔵される古記録翻刻の成果も収載。半世紀にわたり、知恩院の史料編纂にも携わった著者による、記念碑的論集。

たいら・ゆうし：一九三一年京都市生。現在、佛教学大学院教授。浄土宗海徳寺住職。総本山知恩院史料編纂所主任。

【6月刊行】

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

◎宗祖伝承と一般寺院 法然上人黒谷通世の社会的背景／遠州桜ヶ池譚私考／史料「美作誕生寺所蔵近世文書」ほか

◎民間寺院の生態 近世における一村落寺院の中興とその壇越／近世における民間寺院の生態ほか

◎鳥羽法伝寺宗義出入一件 史料「開山不退上人本山江被召出候問答之一件記」ほか

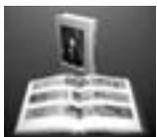
◎知恩院の古記録より 史料「華頂阿弥陀堂丈六尊像縁由」／知恩院蔵「宗名一件抜書」についてほか

大本山くろ谷 金戒光明寺 宝物総覧

発行・浄土宗 大本山くろ谷 金戒光明寺

法然上人により開かれた紫雲山くろ谷金戒光明寺には、多くの文化財が蔵され公刊が望まれていた。法然上人八百年大遠忌にあたり、約五七〇点の宝物全点をF M スクリーン高精細印刷によるオールカラーの大型図版で掲載。

◎内容◎ 法然上人と金戒光明寺(法王満誉) 伽藍と庭園(写真水野克比古) I 仏像・彫刻 II 仏画 III 絵画 IV 経典・仏教書跡 V 古記録・古文 VI 書 VII 什宝・工芸他 歴代略譜と伽藍興隆(白苔頭成) 名墓録・くろ谷金戒光明寺備要 刊行物・年表・宝物目録



【4月刊行】

▼A4判変型・五一〇頁／定価二九、四〇〇円

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

奥州と関東を主に、戦国期以降の仏教・神道・修験道・陰陽道等と地域社会とのかわり、東照宮や寛永寺を中心とした幕府權威をも視野にいれて考察。本所權威の在地社会への浸透、在地社会における諸宗教の共存と対抗、民衆宗教の展開とそれを規定する社会情勢、そして在地寺院と宗教施設の「場」としてのあり方を追求する。



第一編 南奥州における宗教と在地社会

奥州信達地域における惣社制の形成／近世中後期における惣社制を支えた人々／地方神職・修験の活動と在地社会／惣社制と地方神職の動向／靈山寺の復興と秩序形成／近世後期における南朝の顕彰と在地社会

第二編 関東における修験と在地社会

本山派修験の活動と真言・禅宗寺院／関東における本山派修験の存立事情／幕末期における修験の動向と在地社会／近世における禅宗寺院の機能と在地社会

第三編 民衆宗教の展開と近世国家

関東における富士信仰の展開と幕府權威／民衆宗教と本所權威

【4月刊行】

▼A5判・三八〇頁／定価八、一九〇円

かんろ・ようすけ：一九七五年福島県生。現在、駒澤大学非常勤講師・市立市川歴史博物館学芸員。

とくし 禿氏文庫本 龍谷大学善本叢書 29

大取一馬責任編集

龍谷大学名誉教授禿氏祐祥博士旧蔵の文庫から善本に値するものを影印公刊。

▼A5判・六七四頁／定価一四、七〇〇円

いけばなにみる 日本文化

明かされた
花の歴史

鈴木榮子著

古代の供花から現代のいけばなにいたるまで、日本文化に一貫して継承されてきた精神とは、「生」への意識すなわち生命を尊ぶ思想である――

「お稽古事」としてとらえられがちで、外形の歴史にしか注目されてこなかったいけばな。その精神にはじめて学問的な光をあて、日本文化という大きな枠組みの中にとらえる。外国人向けの「英語でいけばな」教室を主宰する著者が、時間の経過、流派の差異を超え、いけばなに継承される精神を探る。図版多数掲載。

【立ち回り】

供花の日本化

立花

【いける】

抛入花

芸道としてのいけばな

世間からみる立花・いけばな

【継承する】

盛花

戦後の花道界

考察「いけばなにみる日本文化」



好評
増刷

▼四六判・二三五八頁／定価二、七三〇円

すずき・えいこ：元日本航空国際線客室乗務員。結婚退職後カナダ・アメリカ滞在を経て広島に帰国。一九八三年から「英語でいけばな」クラス開講。

広島大学・広島女学院大学・宝塚大学大学院他非常勤講師。博士（芸術学）宝塚造形芸術大学。

花道古書集成「全五冊」

華道沿革研究会編

初期東山時代の代表的秘伝書をはじめ、江戸初期、中期の諸流祖の花道書から幕末に至る主な花道書を収録し、大日本華道会より昭和5年に刊行されたものの復刻。貴重な文献と作例図により生花の歴史・理論・技法の真髓に触れることができる。

▼A5判・総三四〇〇頁／定価三三、六〇〇円

続花道古書集成「全五冊」

続花道古書集成刊行会編

未刊の古写本に重点をおいた続編。花道草創の室町時代初期から各流各派成立、爛爛の時期江戸時代末に至る秘伝、稀覯本を網羅し、中でも「華厳秘伝の大事」「極儀秘本大巻」「藤掛似水華伝書」「諸花撰入百瓶圖」雲の七上」などは特筆すべきである。

▼A5判・総二七〇頁／定価三六、七五〇円

与謝野晶子の「源氏物語礼讃歌」

伊井春樹著

小林一三による与謝野家への物心両面での庇護下、「源氏物語礼讃歌」が詠まれた背景、いつ秋成の短冊屏風を目にしたのか、さらには晶子自身においても代表作としての認識がどのように醸成されていたのか、逸翁美術館特別展覧会のテーマをより深く追い求めた一書。

▼四六判・二二六頁／定価一、四七〇円

与謝野晶子と小林一三

逸翁美術館編

阪急東宝グループを興し、明治・大正・昭和の実業界で活躍した小林一三。与謝野晶子もまた、小林一三がその才を見込み、支援した作家である。本書は、晶子が一三に贈った「源氏物語礼讃歌」短冊全五四枚、これを詠むきっかけになった、上田秋成筆「源氏物語短冊貼交屏風」をはじめ、その由来を記した手紙や、交流を物語る資料一六六点収録の、逸翁美術館特別展図録。

▼A4判・九四頁（カラー三二六頁）／定価一、〇五〇円

一九二〇年代 東アジアの文化交流Ⅱ

川本皓嗣・上垣外憲一編

大手前大学比較文化研究叢書7
〔7月刊行予定〕

まえがき

上垣外憲一（大手前大学教授）

第一部 東アジア総観 一九二〇—一九三〇
一九二〇年代の東アジア文化交流と間テクスト性
孫文の日中経済同盟とその周辺 竹村民郎（国際日本文化研究センター共同研究員）

第二部 演劇の西洋・東洋
一九二〇年代中国におけるシエイクスピア
辻聴花の中国劇研究 周 閔（北京言語学大学教授）

第三部 相互理解の詩学
小さな詩・周作人の日本詩歌論について 劉岸偉（東京工業大学教授）
萩原朔太郎と韓国「香笛」の響きと官能表現の変容を中心に 梁東国（祥明大学教授）

第四部 花咲く文芸
自伝か、小説か、詩か！金子光晴・森三十年代が描いた一九二〇年代の上海 趙 怡（東京工業大学非常勤講師）
「もの」と云ふもの

郭沫若の「女神」を再読する 岩谷幹子
あどろき 川本皓嗣（大手前大学学長） 藏安生

▼A5判・二二四頁／定価二、六二五円

大手前大学 叢書 比較文化研究 既刊 シリーズ

- ① 谷崎潤一郎と世紀末 松村昌家編
二〇〇一年刊 ▼A5判・二二二頁／定価二、九四〇円
- ② 視覚芸術の比較文化 武田恒夫・辻成史・松村昌家編
二〇〇四年刊 ▼A5判・二四〇頁／定価二、九四〇円
- ③ ヴィクトリア朝英国と東アジア 川本皓嗣・松村昌家編
二〇〇六年刊 ▼A5判・二七六頁／定価三、三六〇円
- ④ 夏目漱石における東と西 松村昌家編
二〇〇七年刊 ▼A5判・二〇八頁／定価二、九四〇円
- ⑤ 阪神文化論 川本皓嗣・松村昌家編
二〇〇八年刊 ▼A5判・二九〇頁／定価三、三六〇円
- ⑥ 一九二〇年代東アジアの文化交流 川本皓嗣・上垣外憲一編
二〇一〇年刊 ▼A5判・二二〇頁／定価二、九四〇円

越境する漱石文学

〔7月刊行予定〕

坂元昌樹・西槇偉・福澤清編

◆漱石の生涯にはたびたびの「越境」が認められ、それは青年期から壮年期にかけての松山・熊本・ロンドンでの漂泊に顕著だが、それは「越境」の実践ではなかったか？

◆熊本大学の研究プロジェクトによる漱石論集の第3弾となる本書では、第1部において、漱石と世界文学との関わりを考察。第2部では「越境の実践」としての「漱石と熊本」という視点から、漱石の熊本時代の評論、エッセイ、交友関係を考察する。

Ⅰ 世界 からみた 漱石

（地方と「世界」の間で）漱石の「グローバルイズム」と「明治の精神」―柴田勝二（異文化の対峙「豊子愼」「緑」と夏目漱石「ケール先生」―西槇偉）
（知の覇権へのまなざし）漱石「虞美人草」と張文環「芸娘の家」を中心に―（蕭幸君）
精神病者をも描くカーチエーホフ、中村古映と漱石―（佐々木英昭）
〔研究コラム〕フランスのラジオで語られた漱石（濱田明）

Ⅱ 世界 をまなびす 漱石

漱石作品と思想―熊本との関連から―（福澤清）
漱石「文學論」の布石―熊本時代に書いた三つの評論―（西川盛雄）
第五高等学校時代の夏目漱石―論説「人生」を読む―（坂元昌樹）
〔研究コラム〕漱石の初期俳句（岩間中正）
〔研究コラム〕横井時敬と熊本（相馬登）

▼四六判・二八〇頁／定価二、九四〇円

漱石と世界文学

坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編

▼四六判・二六〇頁／定価二、九四〇円

漱石文学の水脈

坂元昌樹・田中雄次・西槇偉・福澤清編

▼四六判・二八〇頁／定価二、九四〇円

一六世紀

イングランド農村の

資本主義発展構造

松村幸一著

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書⑱

故・松村幸一氏（大阪経済大学名誉教授）は、膨大な数にのぼる、16世紀イングランド農村における資本主義発展に関する論文を書き残されたが、二〇〇八年二月享年78歳で逝去され、その業績は分散したままになっていた。本書は、そのうち主要な論文をまとめ、巻末に参考文献一覧と索引を付した。

第1部 イングランドの農業資本主義化をめぐる二つの対抗

第1章 「ケットの反乱」について

第2章 封建制から資本主義への移行の形態

第3章 イングランド東部の農業ブルジョア化をめぐる二つの対抗

第2部 イングランド農村構造

第4章 サセックス臨時税課税簿（一五二四～一五五年）の分析

第5章 バッキンガムシア臨時税課税簿（一五二四～一五五年）の分析

第6章 ノーファーク州ギヤロウ郡臨時税課税簿の分析

第7章 レスタシア・ガスラクスン郡の諸階層とその動向

第8章 サファーク州臨時税課税簿（一五二四～一五五年）の分析

第9章 サファーク州ベイバー郡の軍役調査記録（一五二三年）について

第10章 サファーク州における民衆運動

【6月刊行】

▼A5判・六六〇頁／定価一四、七〇〇円
まつむら・こういち：一九二九年京都市生。大阪経済大学経済学部長、同大日本経済史研究所長等を歴任。

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書⑳

「王国」と「植民地」

山本正著

近世イギリス帝国のなかのアイランド

「王国」にして「植民地」——16～18世紀におけるアイランドのイギリスとの複雑な関係を最新研究動向を踏まえつつ丹念に分析し、その位置づけと変遷にとりくんだ成果。
▼A5判・二二六頁／定価二、九四〇円

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書⑳

東アジア経済史研究 第1集

中国・韓国・日本・琉球の交流

大阪経済大学日本経済史研究所編

「近世・近代の東アジア経済史研究」(二〇〇七年大阪経済大学日本経済史研究所主催)の成果10篇。
▼A5判・三四四頁／定価四、二〇〇円

王権と都市

今谷明編

国際日本文化研究センターでの研究の集大成として、編者が壮大な展望のもと組織した共同研究「王権と都市に関する比較的研究」の成果。各時代・各地域での都市史のあり方を相互に比較検討し、「都市とは何か」という命題の解明に挑んだ一書。
▼A5判・三七二頁／定価七、一四〇円

武士と騎士

日欧比較中近世史の研究

小島道裕編

人間文化研究機構連携研究「武士関係資料の総合化」の一環として、日仏で行われた国際シンポジウムの成果。多様な視点から武士と騎士をとりあげた論考19本を収録。「内容」Ⅰ領主と武力／Ⅱ城の形と機能／Ⅲ資料とイメージ／Ⅳ理念と言説
▼A5判・五二二頁／定価九、四五〇円

青柳精一著

〔6月刊行〕

近代医療のあけぼの

幕末・明治の医事制度

日本の医界は近代の大事業をいかに乗り越え発展してきたのか——。遣外使節団の病院視察から、ドイツ医学の導入および医学学校の創設、看護師・女医の誕生、医師法の制定と、よりよい医療を求めた先達のあゆみをたどる。

長年医療ジャーナリズムに従事してきた著者が、幕末・明治の医事制度と社会背景について膨大な史料をもとに考証する。

目次

第一章 序 論

幕末期の蘭医学の興隆と高階安芸守の建白／ベリーの来航と堀田正陸の開国論／松木弘安、福沢諭吉らの「夷情探案」／幕末海外に渡航した医師たち／蘭語に代わる英仏露語の台頭と各種辞典の出版 ほか

第二章 明治新政府の発足とその医事政策

ドイツ医学の導入／お雇い外国人医師の来日／「医制」の制定と長与専齋／明治初期の開業医師と医学学校（塾）／医術開業試験と漢洋医学闘争／病院の拡充と入院料金／女医の登場とその活躍 ほか

第三章 明治中期の医事問題

東京大学医学部の発足と邦人教授の誕生／コレラの流行と国内の防疫体制の整備／薬律の制定と医薬分業の抗争／開業医制の定着と医療費の動き／近代的な看護婦の養成はじまる／軍隊と脚気 ほか

第四章 明治後期の医事問題

日本医学会と日本聯合医学会／医師法制定までの長い道程／医師法制定後の医界事情

あおやぎ・せいいち……一九二四年生。一九五二年朝日新聞関西本社に入社後、『科学朝日』・『モダン・メデイシン』編集部などで活躍。著書に、『診療報酬の歴史』（思文閣出版、一九九六年）。

▼A5判・五七六頁／定価四、九三五円

森本武利編著／酒井謙一訳

〔6月刊行〕

京都療病院お雇い医師

シヨイベ ― 滞日書簡から ―

明治のあけぼのの間もない一八七二年（明治五）、お雇い医師を招いて発足した京都療病院（現・京都府立医科大学）。そこで初代ヨンケル、マンスフェルトに続いて招かれたのがドイツ人医師ハイリッヒ・ポト・シヨイベ（一八五〇〜一九二〇）滞日は一八七二（七）〜一八七三（八）であった。シヨイベが滞日中に母へ送った書簡のコピーをシヨイベの遺族から得た編著者が、その翻訳を通し、彼の生涯をはじめ、ほかのお雇い外国人達との交流や居留地での生活から明治初期の京都の風俗にいたるまでを、生き生きとよみがえらせる。

第一部 滞日書簡―親愛なる母へ―

一八七七年（明治） ライプツィヒから日本への旅／日本への到着／初めてのクリスマス 一八七八年（明治） 京都の生活1／京都の生活2／京都のお祭り／夏期休暇／仕事の進展／京都の生活3／復活祭休暇／コレラの流行／二度目のクリスマスとお正月／京都の生活3／復活祭休暇／コレラの流行／夏期休暇旅行／ベルツ京都訪問 三度目の師走 一八八〇年（明治二） ハインリッヒ親王吹田事件／京都の歓楽街／東京・ベルツを訪問／アイヌの民俗学的研究／京都府から延長契約の話／新しい療病院・医学校の新築／暇夷地への調査旅行 馬車を購入／クリスマスを神戸で 一八八一年（明治四） 横村知事の辞任 一八八二年（明治五） 東京旅行／帰国準備／帰国の途へと惜別の動き 一八八二年（明治五） 東京旅行／帰国準備／帰国の途へ

第二部 京都療病院とお雇い医師

京都療病院の発足とお雇い医師／京都療病院着任までのシヨイベ／シヨイベの日本での活躍／帰国後のシヨイベ
シヨイベの業績（著書リスト） ◇年譜・シヨイベとその時代

もりもと・たけとし……一九三六年生。神戸女子短期大学、神戸女子大学名誉教授。
さかい・けんいち……一九四九年生。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授。

▼A5判・三四六頁／定価七、三五〇円

緒方惟準伝

緒方家の人々と
その周辺

中山沃著

〔7月刊行予定〕

洪庵の嫡子で、ボン、ポードインらに学んだ惟準は、宮廷医療への西洋医学導入、大阪大学医学部・軍医学校の前身創設、大阪での医療基盤確立などに貢献。その自叙伝「緒方惟準先生一夕話」を軸として、著者が博搜した資料とともにその生涯と交友を詳述。幅広く網羅された本書は、とりもなおさず幕末・明治初期の医学界をものがたる基本図書。

〔内容〕

惟準の生誕と幼少期／加賀大聖寺および越前大野での修業／第一次長崎遊学時代と父洪庵の死／洪哉の長崎への再遊／惟準のオランダ留学／幕府崩壊による惟準の帰国／朝廷への出仕、典藥寮医師に任命／浪華（大坂）仮病院の設立とポードイン／大村益次郎の遭難とポードイン・惟準らの治療／大阪軍事病院の創設と大阪府病院のその後／東京在勤時代／惟準の西南戦争従軍／再び東京勤務（陸軍本病院・文部省御用掛兼勤）／大阪鎮台病院院長時代／医事会同社の設立と『刀圭雜誌』の発刊／東京適塾における門弟育成／陸軍軍医監兼薬劑監に昇任／『日本薬局方』編纂事業と母八重の死／陸軍軍医舎長兼近衛軍医長に就任／近衛歩兵隊への麦飯給与と脚氣予防／海水浴奨励と大磯海水浴場賞讃／日本赤十字社および東京慈恵医院の運営に参与／惟準の陸軍退官とその真相／陸軍内部の脚氣問題と惟準／私立緒方病院の創設／緒方病院医事研究会の発足と会誌の発刊／貧民病院設立の企図と挫折／大阪慈恵病院の創設／『一夕話』終了／緒方一族および緒方病院の動向／緒方洪庵の贈位奉告祭と祝賀会ほか／資料篇（21篇）



緒方惟準

なかやま・そとぐ……大正一四年生。医学博士。岡山大学名誉教授。日本生理学会特別会員、日本平滑筋学会名誉会員、日本医史学会評議員、洋学史学会会員、適塾記念会理事。

▼A5判・一〇〇八頁／定価一五、七五〇円

小児科学の史的変遷

深瀬泰旦著

小児科医として地域医療に携わった著者。内外の医学原著から小児科学の事跡をたどり、近年、再流行した麻疹など忘れ去られたつづある感染症を考究。

▼A5判・六〇四頁／定価九、四五〇円

脚氣の歴史

ビタミンの発見

山下政三著

本書は、ビタミンB1欠乏症の専門家が、脚氣の歴史をもとに全く新しい視点からビタミン発見の真相解明に迫る二〇世紀医療文化史。

▼A5判・五四〇頁／定価一四、七〇〇円

日本梅毒史の研究

医療・社会・国家

福田眞人・鈴木則子編

日本人はいかに性感染症と対峙してきたか。「家・共同体・国家、さらに国際社会がいかに介入し、その態度を変容させたか。共同研究の成果九篇収録。

▼A5判・三九二頁／定価七、三五〇円

東大医学部初代総理池田謙斎

池田文書研究会編

池田文書の研究〔全2冊〕

東大医学部初代総理、陸軍一等軍医、宮内省侍医局長をつとめた謙斎。彼宛書簡など約四千通の文書類を取録。医学史のみならず政治・宮廷史に寄与。

▼A5判・総七六四頁／揃定価一五、三三〇円

緒方洪庵

幕末の医と教え

中田雅博著

新聞記者である著者が、洪庵関係資料を精査、綿密な取材の下に産経新聞紙上に連載した『適塾再考』を再構成。適塾門下生の活躍にも光をあてる。

▼A5判・四〇〇頁／定価二、六二五円

たのむらちくでん 田能村竹田 基本画譜

宗像健一編著

〔全二巻〕

図版篇・解説篇

※田能村竹田(安永六年〜天保六年)は資性文雅を好み高才多能、詩歌・文章・書画・茶・香みなに通曉。池大雅、与謝蕪村のあと、岡田米山人・浦上玉堂より少しくおかれて登場し、青木木米・頼山陽・浦上春琴・岡田半江らとわが国南画の隆盛期を築いた。

※図版篇には厳選された一四〇点の作品を大型図版で収録。解説篇には総論と基本作品の詳細を極めた個別解説のほか、題詩・落款・印譜・年譜などを収録。
※田能村竹田研究では他の追隨を許さない編者による作品選別は、今後の研究の基盤となる。

※美術史はもちろん、豊後(大分県)の地誌編纂に携わるなどした竹田の多才にあわせ、煎茶・漢詩・儒学・歴史など広範な研究に大いに益する。

竹田・南画研究に必携
新たな地平を拓く決定版

◎ 図版篇 ◎

- 基本作品(カラー58点)
- ・ 作画の変遷を通るうえで重要な作品
- 補遺Ⅰ(カラー37点)
- ・ その他の重要な作品
- 補遺Ⅱ(モノクロ36点)
- ・ 初期作品を中心に、割愛しがたい作品を過去の刊行書等から複写
- 補遺Ⅲ(モノクロ9点)
- ・ 関連する資料的作品等

◎ 解説篇 ◎

- 総論
- 解説
- ・ 基本作品58点を詳細に解説(作品をモノクロで再掲)
- 題詩等・落款
- ・ 題詩の翻刻と落款を原寸で収録
- 印譜(2色刷)
- ・ 主要印59顆を原寸で収録
- 年譜
- ・ 各事項の出典資料を明記(30頁)



【お詫び】震災の影響により紙材が調達できず、刊行が遅れております。現在、今夏の刊行を予定しております。今しばらくお待ちくださいますようお願いいたします。

▼B4判変型・総三九四頁
定価二九、四〇〇円

美の縁

び

よすが



よく目にする、少々筆の荒い岸駒の虎とは違い、丁寧な描写が美しいリアルな縞模様と繊細な毛描きは応挙の影響であろう。しかし、応挙の虎の人懐っこさはなく、野性的な迫力に溢れ、応挙の虎よりも、虎らしくなっている。

寛政一年に、岸駒は清人から虎の標本を得ていた。そのうち脚部は現存している（富山美術館）。この作品で、珍しく後脚の裏側を見せているのは、その標本の観察に基づくものであろう（おもしろいことに、

この表現は最晩年の「虎図屏風」〔「國華」一〇六一〕にも見られる）。頭部の標本は、写生図が残っている（栗東歴史民族博物館）。その写生図には「戴平」「細（齒）上下六枚」など特徴が書き込まれているが、平ら

◆ 猛 虎 ◆ 岸駒

な頭と下の歯六本は、この作品に当てはまる。この虎図のリアルさには、標本の観察が生かされているようだ。さらに、舌の洋風画的描写が頭部をリアルにしている。岸駒には洋風画の作品があり、この技法は不思議ではないが、このような東洋画の虎に応用されていることは注目値する。

「虎頭館」の号は、虎の標本を得てから用い始めた。この作品は、画風や署名の書体から寛政末から享和頃、五〇歳前半の作品と思われる。二顆の印章のうち、下の「岸駒」印の「岸」字の「干」が他の作品のものとは違っているが、この作品の印にある横棒は何かの事情で加えられたのであろう。それ以外は他のものと同じである。

